

養蚕民家のデザインと変容 ―利根川上中流域の＜総二階型＞民家を中心として―

中谷研究室 千年村研究ゼミ
5214A078-2 田熊隆樹

目次構成

序論

0-1 はじめに / 0-2 研究の目的と方法 / 0-3 論文の構成 / 0-4 既往研究 / 0-5 本研究の位置づけ

本論

第1章 養蚕業の歴史

はじめに / 1-1 養蚕とは / 1-2 日本の養蚕業 / 1-3 利根川上中流域の養蚕業 / 1-4 小結

第2章 利根川上中流域の養蚕民家

はじめに

2-1 養蚕民家に関する言説

2-2 間取りによる分類

2-3 外観による分類

2-4 ＜屋根裏型＞と＜総二階型＞

2-5 小結

第3章 ＜総二階型＞の意義

はじめに

3-1 発明前夜

- 3-1-1 近世という時代 ―とくに飢饉について―
- 3-1-2 農書の発生 ―宮崎安貞と大蔵永常の思想―
- 3-1-3 養蚕書の発生 ―旅する種師―

3-2 ＜総二階型＞の発明

3-3 ＜総二階型＞の普及

3-4 小結

第4章 養蚕民家の変容についての概論

はじめに

4-1 養蚕衰退までの変容

- 4-1-1 ＜屋根裏型＞の複合
- 4-1-2 ＜総二階型＞へのトラスの導入
- 4-1-3 独立蚕室の増加

4-2 養蚕衰退後の変容

- 4-2-1 民家の変容傾向－既往の研究から－
- 4-2-2 養蚕空間のもてあまし
- 4-2-3 養蚕空間の転用

4-3 ＜屋根裏型＞と＜総二階型＞の変容傾向

4-4 小結

第5章 土地条件のちがいによる＜総二階型＞の地域的変容

はじめに

5-1 山と低地－調査地と調査方法－

5-2 養蚕民家の形態

5-3 生業の変遷

5-4 7つの養蚕民家

5-5「クラ使い型」・「仮住まい型」

5-6 仮住まい型の暮らしー A.N 家 5世代の住まいの変遷ー

5-7 小結

第6章 養蚕民家の「資材性」と現在への影響

6-1 利根川上中流域の養蚕民家展開図

6-2 養蚕民家の「資材性」と現在への影響

結論

図版出典

参考文献

謝辞

巻末資料 養蚕民家採集カード

(群馬編、稲沢リスト・詳細編、沼和田リスト・詳細編)

0-2 研究の目的と方法

研究の目的は以下の2点である。

- ①利根川上中流域における養蚕民家の歴史的展開を整理し、その中で特に幕末～明治に養蚕家たちにより発明された＜総二階型＞の意義を明らかにすること。（「デザインされたもの」としての民家）
- ②現在に残る養蚕民家について、養蚕業衰退後の生活の変化と民家の変容の関係を明らかにすること。（「変容する存在」としての民家）

- ①についてはこれまでの建築史・養蚕関連の文献を通してまとめ、
- ②については利根川上中流域で行った養蚕民家調査をもとに文献による情報も加えて研究をすすめる。

0-3 論文の構成

第1章で養蚕業について概観し、第2, 3章で対象地の養蚕民家を＜屋根裏型＞と＜総二階型＞に分類した上で養蚕家の発明である後者の意義について明らかにする。第4章で養蚕民家の変容を概観し、第5章で埼玉県本庄市の土地条件や生業の異なる2つの地域における＜総二階型＞の変容のしかたを比較する。第6章で全体の考察をする。

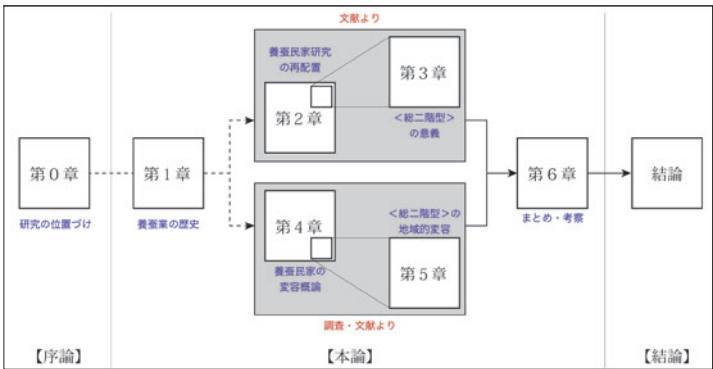


図1 論文の構成（筆者作成）

0-4,5 既往研究と本研究の位置付け

養蚕民家の研究は、昭和11年の今和次郎・竹内芳太郎による武蔵国南多摩郡恩方村の調査をはじめりとする。以後、利根川上中流域においては形式の特徴や分布を網羅的に調査したもの（1970年代ごろまで）から、近年では具体的な養蚕指導書と民家の関係に注目する研究が出てきた。養蚕衰退後の民家の変容に関する研究は唯一で、三世代世帯の養蚕民家屋敷地への住まい方の研究がある。

本研究は、利根川上中流域の養蚕民家についての既往研究を再配置し、さらに幕末～明治に発明された＜総二階型＞の意義を考察し、現在の我々にまで影響を与えるものとしてそれらを再解釈するものと位置付けられる。

第2章 利根川上中流域の養蚕民家

建築史におけるこれまでの養蚕民家に関する言説と研究（間取り・概観による分類）を確認した上で再配置し、

＜屋根裏型＞（＝民家の屋根裏で養蚕をおこなっていた民家）

＜総二階型＞（＝民家の二階で養蚕をおこなっていた民家）

の2系統に分類し、＜屋根裏型＞は在来の寄棟草葺き屋根の閉鎖的な

屋根裏に、光と風を取り込むという一つの目的に対するバリエーションとして解釈でき、＜総二階型＞はその発生において、幕末～明治初期の養蚕家たちによる「発明」であるという点で＜屋根裏型＞のさまざまな養蚕民家とは一線を画す存在であることを指摘した。

上記2系統の歴史的関係を示す図を作成し、利根川上中流域における分布地図も作成した。
（[👉レジュメ裏面中央および左上の図参照](#)）

第3章 ＜総二階型＞の意義

養蚕家たちによる＜総二階型＞の発明と普及には、近世に現れた養蚕書の存在があった。【3-1】ではまず養蚕書が生まれる背景として、飢饉・凶作などの近世の時代性、そしてその中で生まれてきた近世農書の系譜に着目した。とりわけ宮崎安貞『農業全書』（1697）における「先進地の技術を他所へ普及する思想」、大蔵永常『公益国産考』（1859）における「工芸作物などの国産（＝特産品）によって農民の生活向上を目指す思想」の重要性を指摘した。次に近世の重要養蚕書の内容を確認し、この時代の養蚕書において「蚕室についての言及」はわずかであることも明らかとなった。しかしその中で上垣守國『養蚕秘録』は実際の民家に影響を及ぼした可能性があることを指摘した。

【3-2】では安政開国（1854）を契機として刊行が急増した養蚕書、および新たな養蚕法として田島弥平による＜清涼育＞、高山長五郎（高山社）による＜清温育＞、木村九蔵（競進社）による＜一派温暖育＞（どちらも＜折衷育＞と位置付けられる）の内容と、提案した蚕室および模範として建てられた蚕室について文献から確認し、まとめた。

【3-3】では以上の3つの養蚕法において提案された蚕室が、どのように利根川上中流域に普及していったのかを、文献と記録から明らかにした。そしてそれら普及の様相と、養蚕法を確立した養蚕家たちが皆「種師」（＝蚕種製造家）であったことを考え合わせ、

- ①農民の生活向上のために開発した新たな養蚕法を可能にする **物質的な空間**として
- ②蚕種の販路拡大のために、自らの養蚕法を体现する **観念的なイメージ**として

という＜総二階型＞民家のもつ二つの意義を見出した。

（[👉第3章まとめはレジュメ裏面右上の図参照](#)）

第4章 養蚕民家の変容についての概論

＜屋根裏型＞・＜総二階型＞養蚕民家の変容について論じた。

養蚕衰退までの変容については、 i . ＜総二階型＞が普及してからも建てられ続けた＜屋根裏型＞の複合、 ii . ＜総二階型＞へのトラスの導入、 iii . 条桑育の登場による独立蚕室の増加について述べ、それらが現存する養蚕民家の多様さを形成していることがわかった。

養蚕衰退後の変容については、屋根裏や2階などの「元養蚕空間」がその後どのように使われているかを検討し、①物置化・空洞化によって「もてあまし」の状態にあるものと、②部屋や他の生業のために転用されている状態にあるものの二つがあることを示した。またそのうち①は＜屋根裏型＞・＜総二階型＞双方に見られ、②については＜総

^[1] 農民に向けた養蚕法の指導書。農書のうちの一つ。

^[2] 農民に向けた農業指導書であるとともに、時に農民の生活態度などを論じた啓蒙書でもあった。

^[3] 元和9年（1623）安芸国（現在の広島）生まれの中流武士であったが、福岡藩にて浪人となり、以来40年間以上農業に従事した人物。

^[4] 1768-1860？ 豊後国（大分県）の商業中心地に生まれ、天明の飢饉の惨状を見て農業と経済を結びつける思想を確立、諸国を旅して30冊以上の農書を著した。

^[5] 1803出版の養蚕書。上垣守國は但馬國の蚕種家

^[6] 1822-1898。群馬県の養蚕家。『養蚕新論』『続養蚕新論』を著す

^[7] 1830-1886。群馬県の養蚕家。養蚕改良高山社を設立。

^[8] 1845-1898。埼玉県の養蚕家。競進社を設立し全国に養蚕法を広めた。

二階型＞のみに見られることを述べ、養蚕民家のおおまかな変容傾向を明らかにした。
（[👉レジュメ裏面中央の図参照](#)）

第5章 土地条件のちがいによる＜総二階型＞の地域的変容

埼玉県本庄市における山の村（児玉町稲沢）と低地の村（沼和田）において、土地条件のちがいによって養蚕民家がどのように変容、残存しているかを自身の調査から明らかにした。特に養蚕空間の使われ方の変容のちがいから、「クラ使い型」・「仮住まい型」という2つの養蚕民家の残り方を提示し、前者が山に多く、後者が低地に多いことを生業の変遷および人口の流出との関わりから指摘した。

さらに「仮住まい型」の暮らしとして、沼和田で調査したA.N家の5世代にわたる住み継ぎの変遷を図化し、養蚕民家の変容しながら現在においても家族の住まい方に影響を与える存在として「ある」ことを明らかにした。
（[👉レジュメ裏面下部の図参照](#)）

第6章 養蚕民家の「資材性」と現在への影響

第1章～第5章をふまえ、本研究のまとめとして「利根川上中流域養蚕民家展開図」（[👉レジュメ裏面中央の図参照](#)）

また養蚕のためにつくられた空間はこれからも新たな意味を付与できる可能性があること（養蚕民家の「資材性」）、それは養蚕という生業のための空間（生業の変化によって本来の意味を剥奪される存在）であったからこそもののだとして、民家史の中での養蚕民家の特異性と現在における価値を述べた。

結論

本研究の2つの目的に対して以下のことが達成された。

①利根川上中流域において幕末から明治までに蚕種製造家たちによって発明され普及していった＜総二階型＞養蚕民家に「物質的な空間」と「観念的なイメージ」という2つの意義を見出し、デザインされた民家が普及していく様相の一端を明らかにした。

②現存する養蚕民家に対して「クラ使い型」・「仮住まい型」という2つの残り方を定義した。それらを養蚕衰退後の生業の変遷と人口流出との関わりから説明し、山では前者が、低地では後者が多い傾向を本庄市における調査から見出した。また後者は変容しながら現在においても家族の住まい方に影響を与える存在であり、養蚕民家（とくに＜総二階型＞）はこれからも新たな意味を付与できる可能性（＝資材性）があること、そしてそれが蚕のためにつくられた大空間を内包する養蚕民家の特異性であることを明らかにした。

既往研究 今和次郎・竹内芳太郎「養蚕技術の変遷に伴う家屋の変化」(1936) / 田島豊穂「蚕室建築に及ぼした養蚕指導書の影響－明治・大正期の伊勢崎・佐波地方を中心にして－」(『群馬県立歴史博物館紀要 第4号』,1983) / 星和彦・平野博司・松浦利隆「近代養蚕農家の研究1－群馬県平野部を中心として－」(『群馬県立歴史博物館紀要 第20号』, 1999) / 小暮光朗「群馬県藤岡市における養蚕住宅と高山社「養蚕法」にみる蚕室の特色との関連性について」(日本建築学会関東支部報告集, 2002) / 石田寿信「伝統的養蚕集落にみられる三世代世帯の居住形態」(日本建築学会計画系論文集, 2006) ほか
主な参考文献 今和次郎『草屋根』(相模書房,1941) / 原田龍雄・濱口幹三『赤城山麓の民家』(群馬出版株式会社, 1948) / 『群馬県蚕糸業史』(群馬県蚕糸業協会,1954) / 二川幸夫・伊藤ていじ『日本の民家 武蔵・両毛』(美術出版社,1958) / 村松貞次郎『日本建築技術史』(1959) / 『埼玉県蚕糸業史』(埼玉県蚕糸業協会,1960) / 矢島胖『上州の民家』(みやま文庫 34, 1969) / 山本勝巳・川島宙次・小林昌人『関東地方の民家』(明玄書房,1971) / 『日本農書全集』12,13,14,35,47,(農山漁村文化協会,1978-1997) / 西山卯三『日本のすまい III』勁草書房,1980/ 林野全考「近畿の民家 畿内を中心とする四間取り民家の研究」(相模書房 1980) / 吉武成実・佐藤忠一『シルクロードのルート』(日中出版, 1982) / 杉本尚次『日本民家の旅』(日本放送出版協会,1983) / 『明治農書全集9』(農山漁村文化協会,1983) / 小林昌人「民家の経済とのかかわりと生業への適応－養蚕家屋を中心に－」(『民俗建築』85, 1984) / 筑波常治『日本の農書』(中公新書, 1987) / 宮澤智士『日本列島民家史』(住まいの図書館出版局,1989) / 藤森照信『日本の近代建築 (上)』(岩波書店,1993) / 内村鑑三『代表的日本人』(岩波書店,1995) / 菊池勇夫『日本歴史叢書 近世の飢饉』(吉川弘文館,1997) / 高木賢編著『日本の蚕糸のものがたり』(大成出版社, 2014) ほか

